

小樽を訪れた2人のオランダ人 —— その珍道中 ——

倉 田 稔

私は久しぶりに、1991年に、旧友であるオランダ人夫妻をアムステルダムに訪れた。すると、「1993年にはヴァカンスで日本を半月ほど訪れたい」と言う。こうして同年の秋に、彼らは日本に来ることになった。私は彼らのために計画をたて、小樽、東京、大阪・京都を見てもらおうことにした。二人の出発直前に、大型ジェット旅客飛行機がアムステルダム市内の大型アパートの上に墜落し、大事故・大惨事となった。彼らは郊外に住んでいるので、大丈夫だろうと、私は半分思っていた。そこに彼らから電話がかかってきた。「飛行機は自分の家には落ちなかったが、知合いがその事故で亡くなった」というのだ。だから二人の日本訪問が少し遅れることとなった。

彼らはやってきた。10月末であった。そしてまず一週間、小樽に滞在した。その後、大阪・京都と東京に行くことになった。だから私たちは、二人を小樽とその近辺にかぎって案内をしたのだが、それがまた珍道中であった。

なにしろ、彼らは、霊柩車が面白いと言って、写真をとる。また神仏具店も写真をとり、「ヨーロッパとカルチャーが違うね」と言う。

市内の駐車場に、我々が車を入れている時、二人は感心して見ていた。機械で車を上げ下げする駐車場は、オランダにはないそうであって、二人はそれを随分しげしげと見つめていた。それにまた、そのパーキングの係の初老男性は、大変人なつこいので、彼ら二人は、「日本人は随分いい」、と感想を言っていた。

彼らと温泉に入り、定山溪へドライブに行った。それは土曜日であったが、二人は、道中でトラックが道路を走っているのを見て、「オランダでは、土・日は休養の日なので、トラックは走っていないのだが、日本ではずいぶん走っている。日本はすごいな、働いているな」と語った。これは北海道だけのことではない、日本中そうだろう。もちろんヨーロッパでは休日が多いからである。

街中では、警官のような制服の人々がいるので、「あれはガードマンだ」と教えると、「ずいぶんガードマンの多い国だ」と言っていた。道路工事の交通整理の作業員も、警官のような服装をしているので、警官がたくさんいると彼らは思うらしい。

彼らの宿舎では、真夜中、人が入ってきて、家の中を歩き回っていたので、それを泥棒かと思ったそうで、「あれは一体誰か」、と翌日私に問うのだった。私が職員にそれをきくと、それは夜回りのガードマンだった。

小樽の街を歩いていると、道路にそって、かなり下水溝があり、それも、蓋がしていない。雪を捨てるためにそうなったいる、と私は思うのだが、彼らはそれを見て、「これは危険だ。蓋をしなければならない」と、しきりに言っていた。

市役所前の通りを皆で歩いている時、ゴミが道の角にあった。というよりも部分的には散乱していた。ビニール袋に入っているものと入っていないゴミ、夫人はそれをカメラで撮った。私は、やめてくれとも言えずに、参った。

なお、この夫婦は街を歩くとき、手をつないでいた。

私は二人に、大学の私の少人数授業にも加わって貰った。また大講義室での私の授業風景を見て貰った。そこで私が短い講義をした。彼らに分かってもらうために、オランダ語で話そうと思ったが、学生には分からないだろうから、英語で喋った。話が終って、何か発言することがあるかと、夫人にいうと、「もちろん」(why not)。といって、彼女は、喜び勇んで教壇の上にやってきて、マイクをもって、英語で短い挨拶をした。しかし、授業が終って帰り際に、「日本ではこんなに学生の私語が多いのか、失望した」と言われて、私は参ってしまった。学生は、この授業は国際的だったと言ったが、困ったことだった。英語だったから私語が多かったのだろうか、分からない。また特にこの頃は、学生の私語が多い年だったので、残念だったが、私もそんな言い訳はできない。

カラオケは、アムステルダムでも店が二つほど出来ているそうだが、「評判となっているので、なかなか入れない」と言う。そこで、市内のカラオケにつれていったら、大変喜んでいて。ほとんど全部英語の歌をかけてあげた。ヨーロッパ人は最近、カラオケが好きになっている。ただし、終って出るとき、「ウイスキー・バーというわけですね、比較的簡単な仕事だ」、と言う。

彼らは、カードを持って、それで旅行をしていた。大体ヨーロッパ人は、旅行で大金は持ち歩かないのだ。そのカードは、「ヨーロッパでは最もポピュラーなもので、また世界では二番目に知られているカード」なのだそう。だが小樽では、そのカードはほとんど使えなかった。東京や大阪・京都ではほとんど使えたものである。だから、彼らは現金をすぐ使いきってしまった。そのため当面のお金は、私が貸したのであった。彼らは、「君のような友人がいなかったら、カードでは、ここ北海道を旅行できないわけだ」、と言う。そこで、「カードでお金の引き出しをしたい」、と彼らは言う。だから、小樽で一番大きな銀行へ行行って、換金を依頼したら、「できない」との答えであった。それでは換金できる所はどこかと聞いてみると、札幌で一箇所だけ、そのカードから換金できるところがある、と分かった。しかしそれがどこであるかは、銀行でもはっきりわからないのだった。こうして現金化はできないままだった。

ちなみに、我々が訪れたその銀行で、お客が現金の支払い・受取りを窓口でしていたのを、二人は見えて、「アムステルダムだったら、そんなことをしていると、カウンターのお金を泥棒にひったくられる」、と言った。

こんどは、我々は、小樽の日本交通公社に、大阪・京都旅行の飛行機とホテルの予約をし、さて代金を払おうとしたら、「彼らのそのカードでは支払いができない」、と係員は言う。こういうわけで、小樽ではヨーロッパ人は旅行しにくいことになっている。

最後に、二人は千歳空港から本州に行くことになった。彼らの乗る列車は小樽から札幌乗り換えで、千歳空港へ行く必要があった。私は、もしかしたら、札幌駅では彼らには乗り換えが難しいかもしれないと思って、札幌駅までついていった。それがよかったのだ。ヨーロッパ人では乗り換えはおそらく無理であった。案内表示が、日本人でないと、よく分からない仕組みであった。何番線のどこのあたりで列車を待つのかは、外国人にはできない。「国際都市 札幌」と言う人がいるが、札幌駅は国際的な駅ではなかったのである。

結論としては、小樽の街で彼らに触れ合った人々が大変親し気で、二人は、日本人にたいして好印象をもって去って行った。もっともこれは 1993 年のことである。札幌では現在では状況が少し変わっているかもしれない。